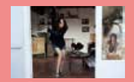
L'Amant d'un jour

Jeannette, l'enfance de Jeanne d'Arc

Jours de France

Jeune Femme

Un beau soleil intérieur


Les Fantômes d'Ismaël

現代映画の地平線をめぐって || ニコラ・エリオット
Où est le cinéma aujourd'hui par Nicholas Elliott

現在、映画はどこにいるのだろう、とりわけ私たちにとって大切だと思える映画は？ 日本の観客たちに映画のセレクションを提案するにあたって、「カイエ・デュ・シネマ」の編集部とアンスティチュ・フランセ日本は、毎回、この問いに直面しているとはいえ、現在、テレビシリーズが大挙して放映され、映画祭の賞によるまやかしの価値が溢れ、インターネットや携帯電話で次々に映像が消費される中、それは年々難しくなってきている。そうした状況に抵抗し、私たちにとって重要と思える映画（ここではとくにフランス映画を問題としているわけだが）を本特集で日本の映画ファンの皆さんに届けたい。単にストーリーを語るためでも、あるいはもてはやされているスターを見るためでもなく、唯一無二の瞬間、エモーション、ある細部、ある映像を前にして震え、感動するために映画館の席に身を置いてほしいという願いとともに。

たとえば、それは、確固たる意志のもとに、現代の恋愛の物語、とりわけ女性たちによって生きられる恋愛感情を捉えるべくモノクロで撮られた、心揺さぶられる三部作の最後を飾るフィリップ・ガレルの新作『つかのまの愛人』、その中心にいる若き女優、素晴らしいルイーズ・シュヴィロットのそばかすのような、いたってシンプルなものかもしれない。愛についてのこの優れたなポエジーである『つかのまの愛人』の中で、ガレルはこれまでにないほど正面切ってセクシュアリティーを扱っているが、その視線は慎みを留め、非常に美しく、官能的作品となっている。

ダミアン・マニヴェルの『パーク』の中盤にある、日暮れのロングショットが、もし映像の絶え間ない流れが速すぎるという理由で正当に評価されることがないとしたらあまりにも残念である。なぜならこの若き映画作家は、このシーンにおいて、夏の太陽が沈んでいく間に、SNSのみでやり取りされる中で訪れる別れを、非常に同時代的方法で、儚さとともに描いてみせているからだ。マニヴェルは非常に少ない製作費ながら、絶対的な独立を保証される状況で映画を撮るという勇気を示している。その独立性は、彼の作品の映像ひとつひとつを動かすその独特の肌理に感じることができるだろう。

こうした映画の開拓者たちの道を粘り強く歩き続けるためにはちょっとしたクレイジーさが必要なのかもしれない。私たちが本特集のためにセレクトした幾本かの作品の紹介を頭の固い人が読んだら、気が狂っている！ と叫ぶ人がいるかもしれない。たしかにジャンヌ・ダルクの幼年期についてのシャルル・ペギーの濃密で詩的な著作を映画化し、しかもデスメタルのミュージシャンによって音楽をつけ、それを同時録音するなど、まったくもってクレイジーなアイディアである。ブリュノ・デュモンは現代フランス映画の中でもっとも冒険好きな監督と言えるだろう。観客はこの作品を前にして、映画がここまで自由になれるなど夢ではないかと、頬をつねってみるかもしれない。『ジャネット、ジャンヌ・ダルクの幼年期』はフランスについて、そして幼年期と神秘主義についての偉大な映画であり、リアリズムが幻想的なるものに出会う場所に身を置いている。

ジェローム・レイボーは、監督自らが「Grindr（ゲイ出会い系アプリ）についての恋愛ロードムーヴィー」とよぶ処女長編『フランスでの日々』で、自由気ままな男が、ゲイ専用出会い系アプリを頼りにフランスを車で旅する物語を描いている。本作は、出会いについて、そして他者に耳を傾け、他者に向かって開かれることについての映画であり、ポール・ヴェキアリを筆頭とするフランスのアンダーグランド映画の流れを汲んでいるだろう。

2017年カンヌ国際映画祭で新人賞であるカメラドールを受賞した（映画祭がたまには正当な判断をすることを示している）レオノール・セライユの処女長編『若い女（原題）』、本作の並外れた魅力は、主役を演じるレティシア・ドッシュのだれもが認めるその演技に依るところが大きいだろう。フランス映画はこれまでもパリの夜の街を若い女性が彷徨する姿をとらえてきたかもしれないが、孤独で困窮した女、同時代的な若い女の姿をここまでしっかりととらえ、かつ笑いを誘う喜劇的奇抜さも持ち合わせた作品は滅多にないだろう。

そしてつねに新作が待ち望まれているふたりの映画作家、クレール・ドゥニ（『レット・ザ・サンシャイン・イン』）とアルノー・デプレシャンの新作（『イスマエルの亡霊』）は、それぞれロマネスク的手法が存分に用いられ、魅力的な作品となっている。またクリストフ・アグの美しいドキュメンタリー『さよならは言わない』、ジュスタン・トリエの長編２作目にあたる見事なラブ・コメディ『ヴィクトリア』もぜひお楽しみいただきたい。

現在の映画の地平線を巡る旅を締めくくるにあたり、ここ数年の間に撮られた２本の美しいアメリカのインディペンデント映画を紹介しないわけにはいかないだろう。ケリー・ライヒャルトの『ライフ・ゴーズ・オン 彼女たちの選択』とジョシュ＆ベニー・サフディの『グッド・タイム』である。この２本は、作風はまったく異なりながらも、それぞれがアメリカの奥深くへと旅に出る。サファディ兄弟はニューヨークの深い、深い夜の中、ロバート・パティンソンのあとを追いながら、猛烈なエネルギーで、これまで映画であまり見たことがなかったようなこの街の貌を映し出す。そしてケリー・ライヒャルトは、モンタナに身を置き、風が吹き抜ける平野で生きる４人の女性たちをしっかりと見つめている。素晴らしい。

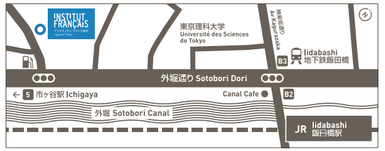
上映スケジュール Calendrier

4.1（日）	12 : 00	**さよならは言わない** *Sans adieu*（99分）
	14 : 30	**ヴィクトリア** *Victoria*（97分）
	17 : 00	**ジャネット、ジャンヌ・ダルクの幼年期** *Jeannette, l'enfance de Jeanne d'Arc*（105分） 上映後、N・エリオットによるティーチインあり suivi d'une discussion avec Nicholas Elliott
4.5（木）	13 : 45	**ヴィクトリア** *Victoria*（97分）
	16 : 00	**さよならは言わない** *Sans adieu*（99分）
	18 : 30	**フランスでの日々** *Jours de France*（141分） 上映前にN・エリオットによる作品紹介あり précédé par la présentation de Nicholas Elliott
4.6（金）	16 : 00	**グッド・タイム** *Good time*（100分）
	18 : 30	**ライフ・ゴーズ・オン　彼女たちの選択** *Certaines femmes*（106分） 上映後、N・エリオットと渡辺進也による対談あり suivi d'une discussion avec Nicholas Elliott et Shinya Watanabe
4.7（土）	13 : 30	**ジェラシー** *La Jalousie*（77分）
	15 : 30	**パリ、恋人たちの影** *L'Ombre des femmes*（73分）
	17 : 30	**つかのまの愛人** *L'Amant d'un jour*（76分） 上映後、N・エリオットによる講演あり suivi d'une conférence de Nicholas Elliott
4.8（日）	18 : 30	**ライフ・ゴーズ・オン　彼女たちの選択** *Certaines femmes*（106分）
4.13（金）	14 : 15	**パリ、恋人たちの影** *L'Ombre des femmes*（73分）
	16 : 15	**ジョゼフの息子** *Le Fils de Joseph*（115分）
	19 : 00	**パーク** *Le Parc*（72分） en présence du réalisateur 監督によるティーチインあり
4.14（土）	11 : 30	**ライフ・ゴーズ・オン　彼女たちの選択** *Certaines femmes*（106分）
	14 : 00	**フランスでの日々** *Jours de France*（141分）
	17 : 00	**イスマエルの亡霊** *Les Fantômes d'Ismaël*（135分） 上映後、トークショーあり（ゲスト：五所純子、結城秀勇） suivi d'une discussion
4.15（日）	12 : 00	**ソルフェリーノの戦い** *La Bataille de Solférino*（94分）
	14 : 30	**レット・ザ・サンシャイン・イン** *Un beau soleil intérieur*（95分）
	17 : 00	**若い女（原題）** *Jeune femme*（97分） 上映後、トークショーあり（ゲスト：大九明子） suivi d'une discussion avec Akiko Ôku

一般：1200円／学生：800円／会員：500円 ■ 開場時間：15分前 ■ チケット販売時間：上映当日各回の30分前から上映開始10分後まで。チケット販売時間内には、当日すべての回のチケットをご購入いただけます。全席自由。整理番号順での入場とさせていただきます。また、上映開始10分後以降の入場は、他のお客さまへの迷惑となりますので、固くお断りいたします。

この企画は以下の都市にも巡回します
La circulation de ce programme est prévue

京都	4.18（水）le 18 avril	同志社大学寒梅館 Université Doshisha
	4.21（土）–4.27（金）du 21 au 27 avril	京都シネマ Kyoto Cinema
大阪	4.21（土）–4.27（金）du 21 au 27 avril	シネ・ヌーヴォ Cine Nouveau
横浜	5月（日程調整中）6.30（土）le 30 juin	東京藝大 横浜馬車道校舎 *Université Geidai à Yokohama*



［会場・お問い合わせ］
アンスティチュ・フランセ東京（旧・東京日仏学院）
〒162-8415 東京都新宿区市谷船河原町15
Tel.03-5206-2500 | Fax.03-5206-2501
www.institutfrancais.jp/tokyo/

INSTITUT FRANÇAIS　CNC　TV5MONDE

日仏交流160周年 160e Anniversaire des relations franco-japonaises

21es Semaines des

CAHIERS DU CINEMA

第21回カイエ・デュ・シネマ週間 in 東京

2018.**4.1**（日）– **4.15**（日）
du 1er au 15 avril 2018

会場　アンスティチュ・フランセ東京　エスパス・イマージュ
à l'Institut français du Japon - Tokyo

プログラム協力・ゲスト　Programme conçu avec
ニコラ・エリオット（「カイエ・デュ・シネマ」ニューヨーク特派員）Nicholas Elliott

ゲスト　Invités spéciaux
ダミアン・マニヴェル（映画監督）Damien Manivel, réalisateur
大九明子（映画監督）Akiko Ôku, réalisatrice
五所純子（文筆家）Junko Gosho, critique
渡辺進也（「Nobody」編集長）Shinya Watanabe, critique
結城秀勇（映画批評家）Hidetake Yuki, critique

つかのまの愛人 *L'Amant d'un jour*

Ambassade de France au Japon　INSTITUT FRANÇAIS アンスティチュ・フランセ東京 Japon-Tokyo　vivre les cultures

『カイエ・デュ・シネマ週間』では、毎年、アンスティチュ・フランセ日本とフランスの伝説的映画雑誌「カイエ・デュ・シネマ」誌が提携し、現在の映画を語るべく、選りすぐった作品をご紹介しています。
21回目を迎える今回は、同雑誌のＮＹ特派員ニコラ・エリオットを迎え、フィリップ・ガレルやクレール・ドゥニ、アルノー・デプレシャンらの最新作のほか、特別ゲストとして迎えるダミアン・マニヴェルなど、新しい世代の監督たちの作品、そして昨年話題となったアメリカのインディペンデント映画を特集します。
クロージングには昨年のカンヌ国際映画祭でカメラドール（新人賞）を受賞した『若い女（原題）』を先行特別上映し、「日本の娯楽映画の近年の最高峰」（黒沢清）と高く評価を得て、ロングランヒット中の『勝手にふるえてろ』の大九明子監督を迎えたトークショーを予定しています。

フィリップ・ガレル　現代の恋愛についての３部作
Philippe Garrel
Trilogie des amours contemporains: de la jalousie à la liberté

Philip Garrel

「女たちは、時に、地上に影を投影する雲のようだ。彼女たちは陽光が射すのを妨げ、そこにできた影は私たちをかすめ、周囲を動いていく。彼女たちが私たちに与えたもの、それは愛であり、それはもうここにはない」――フィリップ・ガレル
『パリ、恋人たちの影（原題：女性たちの影）』の脚本に書き留められ、タイトルとなった詩である。モノクロ、約75分の長さ、そして息子のルイや娘のエステールや、ガレルが多鞭を取る国立演劇学校の若者たちと共に撮られた『ジェラシー』、『パリ、恋人たちの影』、『つかのまの愛人』の三部作は、それまでの作品に濃厚に存在していた自伝的な要素からは徐々に離れ、いまを生きる若者たち、とくに女性たちを描いている。ガレル自らが「フロイド的三部作」と呼ぶこれらの作品は、女性たちの無意識、欲望、苦悩、恋愛における様々な感情、ふるまい、そして身体にこれまでになく迫っていく。

ジェラシー　*La Jalousie*
［フランス／2013年／77分／モノクロ／デジタル］
出演：ルイ・ガレル、アナ・ムグラリス、エスター・ガレル　撮影：ウィリー・クラン
舞台俳優のルイは、妻と娘と別れ、新たな恋人である女優のクローディアと暮らしている。ルイには次々に出演依頼がくるが、クローディアにはこない。クローディアはルイを愛しているが、いつか彼が離れていくのを恐れている。ある晩、彼女はひとりの建築家と出会い、仕事をもちかけられる。ルイはクローディアを愛しているが、今は彼の方が彼女が離れていくを恐れている。そして彼らの間には、ルイの娘、シャルロットがいる。
「私は今、女性も男性と同じようにリビドーがあるのだということを、映画の中で探求しようとしている」――フィリップ・ガレル

パリ、恋人たちの影　*L'Ombre des femmes*
［フランス／2015年／73分／モノクロ／デジタル］
出演：クロチルド・クロ、スタニスラス・メラール、レナ・ポーガム、ルイ・ガレル（声のみ）　撮影：レナート・ベルタ
ピエールとマノンは貧しく、ちょっとした仕事をして生計を立てながら、わずかな予算でドキュメンタリーを作っている。ピエールは研修生の若い女性、エリザベスと出会い、彼女と付き合い始めが、彼女のためにマノンと別れる気はなく、二人とも失いたくない。ある日、エリザベスはマノンが他の男性を会っているところを目撃し、ピエールにそのことを告げる…。
「クロチルド・クロには明白なる才能があり、ひとつのシーンの中で、つねにリズムを変化させることが可能であり、本作に多大な貢献をしている。私はただオーケストラの指揮者が素晴らしいヴァイオリン奏者の演奏をきちんと聞かせられるように耳をそばだてるだけでいいのだ」――フィリップ・ガレル

つかのまの愛人　*L'Amant d'un jour*　先行上映 Avant-première
［フランス／2017年／76分／モノクロ／デジタル］
出演：エリック・カラヴァカ、エステル・ガレル、ルイーズ・シュヴィロット　撮影：レナート・ベルタ
ひとりの女子学生がすさまじい勢いで階段を駆け下り、大学のトイレで恋人である哲学教師と落ち合う。立ったまま、人目を忍んで、ふたりは愛を交わす。3ヶ月前から、アリアンヌは哲学の教師ジルと暮らしている。ジルにはアリアンヌと同じ歳の娘ジャンヌがいる。恋人に去られ、絶望したジャンヌは、父親のもとに身を寄せ、アリアンヌと徐々に親しくなる。ふたりの女たちは愛すること、女性として欲望を抱くについて語り合う。
「カラーで撮る時は絵画で、モノクロで撮る時はデッサンであり、現場では実際に頭の中で描いて、撮影監督にそれを伝える。『パリ、恋人たちの影』はHB鉛筆で描かれたデッサンとしてレナート・ベルタに伝え、『つかのまの愛人』は、もっと太い2Bで描かれた、木炭画に近いデッサンとして伝えた」――フィリップ・ガレル
8月18日（土）よりシネマヴェーラ渋谷　他全国順次公開

オープニング上映 Opening

ジャネット、ジャンヌ・ダルクの幼年期 *Jeannette, l'enfance de Jeanne d'Arc* de Bruno Dumont
［フランス／2017年／カラー／105分／デジタル］
監督：ブリュノ・デュモン　出演：リーズ・ルプラ・ブリュドム、ジャンヌ・ヴォワザン、リュシル・グーティエ
1425年、フランス、ドンレミ村。8歳のジャネットは、まだジェンヌ・ダルクではなかったものの、すでにイギリス人をフランス王国から追い出したいと思っていた。詩人・思想家のシャルル・ペギーによる『ジャンヌ・ダルク（1897年）』と『ジャンヌ・ダルクの愛の秘義（1910年）』を元にブリュノ・デュモンは、未来の聖女の幼年期をミュージカルで描き出した。
「ブリュノ・デュモンは『ジャネット、ジャンヌ・ダルクの幼年期』によってこれまででもっとも不純で、奇妙で、様々なものがいっぱい詰っていると同時に、果敢なほどミニマルですばらしい作品を作り出した。この小さな傑作によって彼の映画は決定的に解き放たれた！」――シリル・ベガン

クロージング上映 Closing

若い女（原題） *Jeune Femme* de Leonor Serraille　先行上映 Avant-première
［フランス／2017年／97分／デジタル／カラー］
監督：レオノール・セライユ　出演：レティシア・ドッシュ、グレゴワール・モンサンジョン、スレマン・サイエ・ンディアエ
30代の女性ポーラは、著名カメラマンの恋人とメキシコから久しぶりにパリに戻るも、その彼と喧嘩をしてアパートメントを追い出される。友人たちからも見放され、仕事もなく、一文無しのまま猫を抱えて路頭に迷う。人も街もよそよそしく、絶望しかかった時に、ある偶然の間違いから、周囲の世界との接点を見出していく。新人女性監督レオノール・セライユの第70回カンヌ国際映画祭カメラドール（新人賞）受賞作品。冒頭からレティシア・ドッシュが文字通り体当たりで、世界と対峙していくその様からとにかく目が離せない。
「ポーラはその中心を失うが、それは完全に周辺に追いやられるのではなく、新たな冒険の始まりを意味している。ポーラの道程に寄り添う夢想的フリー・ジャズの調べのように、この世にあらかじめ定められたものはなく、すべてはこれから作られていくのだ」――ステファン・デュ・メスニルド
今夏、ユーロスペースほか全国ロードショー

ダミアン・マニヴェル　セレクション Carte blanche à Damien Manivel

五十嵐耕平との奇跡のように美しい日仏共同監督作品『泳ぎすぎた夜』が今春公開予定のフランスの新鋭監督、ダミアン・マニヴェルを迎え、2016年カンヌ国際映画祭で絶賛された前作『パーク』、そして彼の友人であり敬愛するウジェーヌ・グリーンの『ジョゼフの息子』を、監督自身たっての願いで同時上映する。

パーク　*Le Parc* de Damien Manivel
［フランス／2016年／カラー／72分／デジタル］
監督：ダミアン・マニヴェル
出演：ナオミ・ヴォクト・ロビー、マキシム・バシュルリー、ソベール・セスマ
夏。とある公園で二人のティーンエイジャーが初デートをする。始めは戸惑い、恥じらっていた彼らも散歩が進むままに距離が縮まり、恋に落ちる。日が落ちて、別れの時間…。そして暗い夜が始まり、公園がそれまでと異なる表情、位相を見せ始める。

ジョゼフの息子　*Le Fils de Joseph* d'Eugène Green
［フランス＝ベルギー／2016年／カラー／115分／デジタル］
監督：ウジェーヌ・グリーン　出演：ヴィクトル・エゼンフィ、ナターシャ・レニエ、ファブリツィオ・ロンジョーネ、マチュー・アマルリック
思春期を迎えたヴァンサンは、母マリーから愛情深く育てられたが、父が誰なのか知らずにいる。ある日自分の父が冷血で皮肉屋の編集者オスカー・ボルムノールだと知ったヴァンサンは父への復讐を企てるが、一風変わったジョセフという男との出会いがヴァンサンたちの人生に変化をもたらしていく。

五十嵐耕平＆ダミアン・マニヴェル監督作品
泳ぎすぎた夜 *La nuit où j'ai nagé*
［2017年／フランス・日本／79分／配給：コピアポア・フィルム＋NOBO］
第74回ヴェネチア国際映画祭オリゾンティ部門 正式出品
第18回東京フィルメックス 学生審査員賞・Filmarks賞受賞
2018年4月14日（土）より
シアターイメージフォーラムほか全国順次公開
公式HP oyogisugitayoru.com/

＊上映作品はとくに字幕の記載がない場合は、すべて日本語字幕付となります。
批評の抜粋はすべて「カイエ・デュ・シネマ」より引用。

新作ベストセレクション Meilleurs films 2016-2018

さよならは言わない
Sans Adieu de Christophe Agou
［フランス／2017年／カラー／99分／デジタル］
監督：クリストフ・アグ
フランス南部マッシフサントラルの東、フォレズの農場で75歳になるクローデットは尊厳を保つため、彼女にとっては受け入れがたく、またその変化についていくのが難しくなった社会と闘っていた。現代社会は毎日少しずつより多く彼女の土地や家畜、また隣人たちの土地や家畜をむさぼっていた。2017年カンヌ国際映画祭ACID部門で注目されたドキュメンタリー。

フランスでの日々
Jours de France
de Jérôme Reybaud
［フランス／2016年／カラー／141分／デジタル／英語字幕］
監督：ジェローム・レイボー　出演：バスカル・セルヴォ、アルチュール・イグアル、ファビエンヌ・ベイブ、ナタリー・リシャール、レティシア・ドッシュ
ある朝早く、ピエールはポールの元を去った。ピエールは自分のアルファ・ロメオで草原や山を特に行く宛てもなく駆け回り、フランスを横断する。ピエールはグラインダーというナンパにうってつけの場所を教えてくれるアプリを使い、ポールはこのアプリを頼りにピエールを追いかけていた。4泊4日の出会いの日々、彼らは再会を果たせるのだろうか？

ソルフェリーノの戦い
La Bataille de Solférino
de Justin Triet
［フランス／2013年／94分／カラー／デジタル］
監督：ジュスティーヌ・トリエ
出演：レティシア・ドッシュ、ヴァンサン・マケーニュ、アルチュール・アラリ
2012年5月6日、大統領選の第二回投票を取材するテレビリポーターのレティシアのもとに、元夫のヴァンソンが娘たちに会いに押しかけて来て…さぁ、戦いが始まった！実際に大統領選が行われている現場で、現在のフランス映画でもっとも輝いているレティシア・ドッシュとヴァンサン・マケーニュ共演で撮られたJ・トリエの処女長編。

ヴィクトリア
Victoria de Justin Triet
［フランス／2016年／97分／デジタル］
監督：ジュスティーヌ・トリエ
出演：ヴィルジニー・エフィラ、ヴァンサン・ラコスト、メルヴィル・プポー
弁護士のヴィクトリアは出席した結婚式で、昔の友人ヴァンサンと、以前担当した薬物事件の依頼人サムに再会する。ヴァンサンはその晩、恋人の殺害未遂容疑で逮捕され、仕方なく弁護を引き受けたヴィクトリアだったが、元夫の迷惑行為に対応したり、なぜかサムを住込みのベビーシッターとして雇うことになったり、数々の波乱が巻き起こる…。人気沸騰中の女優ヴィルジニー・エフィラ主演の本国で大ヒットした恋愛コメディ。

レット・ザ・サンシャイン・イン
Un beau soleil intérieur
de Claire Denis
［フランス/2017年／95分／デジタル／カラー］
監督：クレール・ドゥニ　出演：ジュリエット・ビノシュ、グザヴィエ・ボーヴォワ、フィリップ・カトリーヌ、ニコラ・デュヴォシェル、ジェラール・ドパルデュー
離婚し、シングルマザーのイザベルは愛を探している、真実の愛を。
「（小説家の）クリスティーヌ・アンゴと共同で書かれた本作はドゥニの中でも最も饒舌で、最も笑いを誘う作品となっている」――J-S・ショヴァン

イスマエルの亡霊たち
Les Fantômes d'Ismaël
d'Arnaud Desplechin
［フランス／2017年／カラー／135分／デジタル］
監督：アルノー・デプレシャン　出演：マチュー・アマルリック、マリオン・コティヤール、シャルロット・ゲンズブール、ルイ・ガレル、ラズロ・サボー
映画監督のイスマエルは、外交官の弟イヴァンを題材にスパイ映画を準備中だ。イスマエルはシルヴィアという恋人がいるが、若い頃に突然失踪した元妻のシルヴィアの記憶に取り憑かれている。ある日、そのシルヴィアが突然彼らのもとに現れる…。

グッド・タイム
Good time de Josh & Benny Safdie
［アメリカ／2017年／カラー／100分］
監督：ジョシュ＆ベニー・サフディ　出演：ロバート・パティンソン、ベニー・サフディ、ジェニファー・ジェイソン・リー、バーカッド・アブディ
コニーとニックの兄弟は銀行を襲った。兄のコニーは逃げ切ったが、知的障害を持つ弟のニックはつかまってしまう。コニーはニックの保釈金一万ドルを何とかかき集めようとするが、残されたもうひとつの選択肢は脱走させることだった。ニューヨークの最下層で生きる兄弟の長い夜が始まった…。
「『グッド・タイム』は率直でダイレクトで、緊張感を持って撮られていながら、また多くの側面を持ち合わせいる作品でもある」――ジョアキム・ルバスティエ

ライフ・ゴーズ・オン　彼女たちの選択
Certaines Femmes
de Kelly Reichardt
［アメリカ／2016年／カラー／106分／DVD］
監督：ケリー・ライクハルト　出演：ローラ・ダーン、クリステン・スチュワート、ミシェル・ウィリアムズ、リリー・グラッドストーン
アメリカ北西部モンタナの小さな町で生活する4人の女性。厄介なクライアントに振り回される弁護士のローラ、新居の建設のことしか頭にないジーナ、弁護士をしながら夜間学校で市民向けに法律を教えるエリザベス、牧場で孤独に馬と向き合うジェイミー。それぞれ懸命に生きる彼女たちのたどり着く先は…。
「別々に撮られながらも、同じ空間、同じ美学、同じ演出によって幾人かの登場人物たちによって結び付けられた心揺さぶる3つのストーリー」――ニコラ・アザルベール